様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月３１日現在

機関番号：３３９０６
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008　～2010
課題番号：２０５３０４９２
研究課題名（和文）　死に方をめぐる社会的行為の研究―韓国ホスピスの動態的分析―

研究課題名（英文）　A study on death as a social action: dynamic analysis of the hospice in Korea

研究代表者
株本　千鶴　（KABUMOTO　CHIZURU）
椙山女学園大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：５０３１５７３５

研究成果の概要（和文）：本研究は、韓国ホスピスの実態を分析することによって、現代韓国社会において病いで死ぬという事実がどのように構築されているのか、それにかかわる主体はどのような関係性を形成しているのか、韓国人の死に方にはどのような特性があり、それを成立させている要因は何かを解明することを目的とした。方法としては、韓国国内のホスピス機関やホスピスを管轄する行政機関を対象にインタビュー調査を実施し、その結果からホスピスの現状や制度化へのプロセス、それらの特性や問題点などを整理、分析した。

研究成果の概要（英文）：A purpose of this study is to clarify how the fact of death from illness is constructed in modern Korean society, what kind of relationships are made by the actors concerned, and the characteristics of Korean people’s death, by analyzing the present conditions of hospices in Korea. For this purpose, I carried out an interview investigation at some hospices and the ministry of health and welfare. And then, using that result, I analyzed the characteristics of Korean hospices, process of institutionalization, and some unsolved problems.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：死に方、社会的行為、韓国、ホスピス

１．研究開始当初の背景

（1）死に関する研究は 1960 年頃から蓄積をみせ始めており、ファイフェル編『死の意味するもの』（1959）は哲学、宗教、心理、精神分析、文学、芸術にわたる学際的なデス・スタディの嚆矢といえる。社会学では医療現場での死の様相をフィールドワークによって明らかにしたグレイザーとストラウスや、サドナウの研究などがある。晩年パーソンズの医療社会学の業績もこの時期に産出されている。

また、関連するテーマとして死と死別、悲嘆を対象とする研究は、精神分析学、教育学、看護学、医学、心理学など多分野の領域で展

開されていった。先駆的研究としては、リンデマンによるボストンで起きた大火災での生存者にたいするインタビュー調査と、その症状の分析がある。また、パークスは未亡人やがん患者と死別した遺族などを対象として悲嘆の内実を研究した。

その後、病死や災害死、突然死といった死に方や、生前の人間関係、死者や遺族のパーソナリティまでも要因に含めた多面的な分析が量産されていく。キューブラー＝ロスによる死にゆく人々へのインタビューをもとにした死にゆく過程の分析も画期的な研究のひとつである。

（2）日本では 1980 年代以降に死に関する研究が現われはじめる。小此木啓吾の『対象喪失』は古典ともいえる文献であり、日航機墜落事故の遺族を対象とした野田正彰の研究は死別や悲嘆を綿密かつ実証的に解明した。医療との関連では、ターミナルケアや緩和ケアといった臨床領域で患者や遺族の心理についての研究がみられる。

柏木哲夫は 1984 年に淀川キリスト教病院にホスピスを開設したホスピス運動の先導者であるが、彼は死にゆく患者の心理過程の理解においてロスの死の受容にいたるまでの 5 段階の心理過程を活用しながらも、アメリカと日本では実態は異なるとし、自らの経験から独自の段階論を提示している。

社会的な現象として 70 年代から闘病記や看病記がノンフィクション作品として数多く出版され広く読まれるようになったが、これらの行為のもつ意味のひとつが死の受容である。死にゆく人、その家族・遺族はあらゆる媒体を用いて生の意味を表現したいという欲求をもっている。

反対に、それを研究対象とすることに対してこれまでの社会学は消極的ではなかったかとの感がある。若林一美の一連の研究や副田義也編『死の社会学』など、医療や病気と死の問題を扱った研究もいくつかあるが、死をめぐるリアリティに迫った研究は多くない。自己の死、他者の死を経験するという人間の必然の行為を、医療や感情といった切り口で具体的に探究することの必要性は残されたままである。

特に、限られた研究の多くは、その対象フィールドを日本や欧米先進国としていることが指摘できる。人口高齢化や域内の経済交流の活性化などを勘案すると、アジア諸国の社会の実態を理解する必要性は以前に増して高まっている。このような文化社会学的な観点から、東アジア社会における死の様相というものを理解することは社会学的な意義を大いに含んでいると考えられる。

２．研究の目的

本研究は過去の研究の蓄積をもとに、東アジアの中の韓国における死の実態をホスピスという対象を通じて理解することを目的とするものである。

手順としてはまず、最近の日本、欧米諸国、韓国での社会学における死に関する研究のレビューを行う。

つぎに、韓国現地調査を実施する。現地調査では、ホスピス実施機関（宗教団体を基盤とした機関、大学病院等医療施設を基盤とした機関、地域福祉を基盤とした機関）や、保健福祉部等の行政機関への訪問、聞き取り調査を行う。調査対象は機関関係者およびボランティア、専門研究者などである。

調査では、ホスピスの実施状況、機関の実態、利用者や家族の状況、スタッフの体制、ホスピスの制度化に対する考え方、死別の実際と望ましいあり方、組織的な活動、今後の方向性などについてインタビューする。

そして、これらの調査結果を整理し、現代韓国社会において病いで死ぬという事実がどのように構築されているのか、それにかかわる主体はどのような関係性を形成しているのか、韓国人の死に方にはどのような特性があり、それを成立させている要因は何なのかを解明する。

３．研究の方法

（1）分析における研究仮説の設定、先行研究の検討

①研究仮説の設定：これまでの研究成果を踏まえて、現地調査の研究計画と社会学的分析の方法、論文作成の詳細について検討する。

②先行研究の検討

日本語・韓国語・英語文献を収集・検討する。

（2）資料収集とインタビュー予備調査

①韓国語文献については、インターネット上で収集できる資料はダウンロードによって収集し、現地図書館でしか収集できないものは韓国国立国会図書館、韓国国立中央図書館等で収集・コピーする。

②ホスピス関係者に対するインタビュー調査の予備調査を実施する。現地のコーディネーターをとおして５ヵ所ほどの機関を訪問し、施設見学と同時に現状の調査とインタビュー調査についての見解をうかがう。その結果をもとに、インタビュー調査の質問項目を作成する。

(3) インタビュー調査、文献補足調査
①インタビュー調査の実施
第１段階、第２段階の成果を踏まえて、韓国のホスピス関係者に対するインタビュー調査の準備をする。主な質問項目は、ホスピスの実施状況、機関の実態、利用者や家族の状況、スタッフの体制、ホスピスの制度化に対する考え方、死別の実際と望ましいあり方、組織的な活動、機関と行政の問題点、今後の方向性など。行政機関である保健福祉部にたいしては医療保障、介護保障、老人福祉などとホスピス事業との関連性、モデル事業の成果と今後の行政の方向性などを追加で質問する予定である。
連絡調整は現地コーディネーターに依頼し、インタビュー対象機関の選定を行う。選定に当たっては、ホスピスの設立タイプ（独立型、病棟型、院内病棟型、在宅型）や、母体宗派、地域性などを考慮する。保健福祉部、韓国ホスピス協会、カトリックホスピス協会、韓国ホスピス・緩和医療学会、国立がんセンターには、直接依頼する。
インタビュー調査の趣旨と個人情報の取り扱い方について説明を記述した依頼文書を作成し、メールか郵送で送付する。
②依頼文書によって承諾を得られた機関に対してインタビュー調査を実施する。調査は申請者が直接行うが、現地コーディネーター、あるいは補助者の同行を依頼する予定である。その際、相手方の許可が得られれば、テープ録音を行う。
③インタビュー調査の結果をまとめ、分析する。
④文献補足調査
インタビュー調査の結果、収集の必要性が生じた文献、資料を入手する。韓国語文献の場合、現地にて収集する。

(4) 研究のまとめ（考察･分析･論文執筆）
①第 3 段階で実施した調査結果をまとめる。調査結果の整理、現代韓国社会において病いで死ぬという事実がどのように構築されているのか、それにかかわる主体はどのような関係性を形成しているのか、韓国人の死に方にはどのような特性があり、それを成立させている要因は何なのか、ホスピスを構成する医療、福祉、宗教、市民活動などはどのような関連を持つか、などを分析内容とする。また、インタビュー調査で発見された事実に対しても考察を加え、論文を執筆する。
②文献補足調査
分析作業の結果、収集の必要性が生じた文献、資料を入手する。韓国語文献の場合、現地にて収集する。

４．研究成果
(1) 韓国国内５ヵ所のホスピス関連機関・病院を訪問し、施設見学および担当職員、看護師を対象にホスピス運営の現状と制度化に関するインタビュー調査を実施した。また、保健福祉部でがん対策事業の流れと特徴についてインタビュー調査を行い、ホスピス関連事業の現状と今後の動向について聴取した。これらの調査によって、ホスピスの現状、問題点、がん対策事業との関係性、制度化の状況などが明らかになった。

(2) 調査結果の一部を、「韓国におけるホスピス制度化の現状―医療・宗教・行政―」というテーマで学会報告した。本報告の目的は、近年のホスピス制度化の動向を医療的側面、宗教的側面、行政的側面の３つの視角から整理し、韓国でのホスピス制度化の特徴とその背景、要因について分析することである。
分析の結果、ホスピス制度化への対応と見解の特徴には、専門領域を要因とするものと、韓国社会・文化の特性を要因とするものがあり、前者は重視する要素（行政、医療、宗教）の相違から生まれていること、後者はホスピスの歴史的経緯や死をめぐる文化の影響を受けていることが分かった。そしてこれらの特徴は、韓国でホスピスを制度化するに当たって、促進要因、あるいは制約要因となっていることも明らかになった。
行政の領域では、がん患者の増加、人口高齢化、医療費の増加、ＱＯＬの向上、患者の自己決定といった問題が存在することから、医療の効率化や患者のＱＯＬ向上を前提としたがん対策の一環としてホスピス支援事業が進められている。
しかし、その必要性と制度化への方向性は承認されているものの、いまだ制度成立には至っていない。政治・経済的な要因、医療への期待が強い社会状況への対応、既存ホスピスへの社会保障適用の困難などが、解決すべき問題となっている。
ホスピスを推進する医療関係者においては、緩和医療の確立と普及を目的にホスピス運動が展開されている。ホスピスを実施している宗教領域の関係者との協力や、行政への働きかけ、医師の緩和医療に対する理解と実践を促すための事業や教育などが、具体的な活動内容である。
ホスピス＝死ぬ場所とする患者や家族の認識を、ホスピス＝ＱＯＬを尊重した緩和ケアへと転換させることも、市民への働きかけ

として重要な課題のひとつとなっている。
宗教の領域では、ホスピスが制度化されることによる財政援助や質の担保などは望ましいと思われているが、本来の宗教的使命と合致するものになるのかという問題が残る。手続き上の問題としては、非医療機関が医療機関へ転換することの困難もある（現在、この報告をもとにした論文執筆の準備中である）。
以上のような領域ごとの特徴を析出することができたが、インタビュー調査を継続して実施し、各特徴の具体的な関連性の細密な調査と分析をおこない、韓国におけるホスピスとその制度化のプロセスを多角的な視点から考察することが、今後に残された課題である。

（3）本研究における、現代韓国における医療と死、社会保障、専門職などとの関係性の考察は、現代韓国社会の特性の一端を理解するのに貢献するものと考えられる。今後は、日本のホスピス（あるいは緩和ケア、ターミナルケア）の特性との比較分析へと研究を進展させ、両国を含む東アジアの特性を探求する有効な方法を見出していきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 株本千鶴、韓国の老人長期療養保険制度―施行 1 年後の実態と課題、健保連海外医療保障、査読なし、No.832009、2009 年、pp.22－27

② 株本千鶴、金大中・盧武鉉政権の社会保障政策、海外社会保障研究、査読なし、167 号、2009 年、pp.18－28

③ 株本千鶴、韓国の医療保険：現況と動向、健康保険、査読なし、62(11)、2008 年、pp.32－35

④ 株本千鶴、新たな介護制度の始動―韓国の老人長期療養保険制度―、あいおい基礎研究 REVIEW、査読なし、4 号、2008 年、pp.50－57

〔学会発表〕（計２件）
① 株本千鶴、韓国におけるホスピス制度化の現状―医療・宗教・行政―、仏教看護・ビハーラ学会第 6 回年次大会、於上越教育大学学校教育実践研究センター、2010 年 8 月 29 日

② 株本千鶴、在日東アジア出身研究者の「東アジア研究」（東アジア社会政策の国際比較研究― 日本・中国・韓国の若手研究者の視点と提起 ―）、社会政策学会第 118 回大会、於日本大学、2009 年 5 月 24 日

〔図書〕（計６件）
① 株本千鶴、井上俊・伊藤公雄編、身体・セクシュアリティ・スポーツ　社会学ベーシックス⑧、世界思想社、pp.137－146、2010 年

② 株本千鶴、末廣昭編、東アジア福祉システムの展望―７カ国・地域の企業福祉と社会保障制度―、ミネルヴァ書房、pp.174－210、2010 年

③ 株本千鶴、金成垣編、現代の比較福祉国家論―東アジア発の新しい理論構築に向けて―、ミネルヴァ書房、pp.107－136、155－209、2010 年

④ 株本千鶴、副田義也編、内務省の歴史社会学、東京大学出版会、pp.155－209、2010 年

⑤ 株本千鶴、健康保険組合連合会編、社会保障年鑑 2009 年版、東洋経済新報社、pp.355－365、2009 年

⑥ 株本千鶴、健康保険組合連合会編、社会保障年鑑 2008 年版、東洋経済新報社、pp.345－355、2008 年

６．研究組織
(1)研究代表者
株本　千鶴（KABUMOTO　CHIZURU）
椙山女学園大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：50315735

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし